表紙の解説（第11グループ）

国宝・中空土偶

北海道初の国宝、中空土偶は道南の函館市南茅部地区で発見され、2007年に道内で唯一国宝に指定された土偶です。

中が空洞の中空土偶のなかでは国内最大であり、作りは極めて精巧で写実的です。

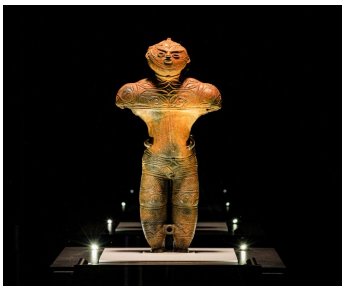
形状は、正面を向いた顔、左右に大きく張った肩、くびれた胴、長い両脚と均整が取れています。

文様は、刻み目が施された細い粘土ひもの貼付けと削り出しで表現する三叉（さんさ）状入組文。三叉文と円形文を組み合わせた文様構成が優れており、縄文時代後期後半の特徴を表している。

配石を伴う土杭墓群に関連して埋葬された可能性がたかく、当時の祭祀や呪術的文化を知る手がかりとなります。

1975年（昭和50年）小板アイさんが畑でジャガイモを掘ろうとして、発見されました。町内の役場の学芸員さんの所へ持って行き、縄文時代の土偶であるとわかりました。

中空土偶（カックウ）



愛称： 南茅部の茅（カヤ）と中空土偶の空（クウ）を合わせて（カックウ）
高さ： 41.5㎝　幅 20.1㎝　重さ1.745㎏
時代： 縄文時代後期後半（3,500年前）
出土： 北海道函館市著保内野（ちょぼないの）遺跡 1975年8月24日
所有： 函館市

発見から4年後、1979年に日本の重要文化財に指定され、アメリカのスミソニアン博物館、イギリスの大英博物館はじめ、世界4か国にて展示公開されました。

2007年に国宝となり、2008年には北海道洞爺湖サミットでホテルに各国の首脳を歓迎するために、特別展示されました。

現在は、2011年10月にオープンした臼尻町「函館市縄文文化交流センター」に展示されいつでも、見学可能となっております。

函館市と近郊の市町村が連携し、カックウの魅力を色々と発信しております。